

22 亀井の水

伝承地：西原町1056

参考書籍：7・9・17・20・21



(亀井の水)

江戸時代から、宇都宮の人々に親しまれた名所として、七木、七水、八河原があったが、その七水の一つとして、古くから多くの旅人ののどを潤した名泉「亀井の水」がある。

この水は、源義経の妻として有名な静御前のおともをした亀井六郎にかかわるものである。

現在では、石造りの親子亀が置かれ、それによりむかしの面影をしのぶ程度で、清水は湧き出てはいない。

なお、亀井の水の道をはさんだ西側に、江戸時代の初期に創建された常念寺があり、その寺の山号は、亀井の水の伝説にちなんで亀井山という。

源平の争乱が壇の浦の戦いをもって源氏の勝利に期し、世の中が落ちついてきた文治3年

(1187)の春、源義経は兄の頼朝と仲たがいをしたために追われて、吉野山にかくれていました。しかし、追っ手が山のすぐ近くまできたので、武蔵坊弁慶とわずかの家来をともとして、奥州平泉（今の岩手県平泉）の藤原秀衡をたよって落ちていきました。

義経の妻の静御前は、夫のいる奥州へ行く決心をし、亀井六郎や駿河次郎らにまもられて、平泉に向かってたびだちました。

なれない長旅と、たび重なる心労のため、宇都宮大明神（二荒山神社）を目前にして、足どりが重くなり、のどのかわきがひどくなった静御前は、おともの駿河次郎に水を求めてくることをたのみましたが、次郎は追っ手にみつかることを心配し、ためらいました。その時、何を思ったのか、亀井六郎は、長い間神仏に祈り、持っていた槍を深く地面につきさしました。すると、不思議にも、その槍をつきさしたところから、清らかな水があふれ出しました。六郎はその水をすくい、疲れはてている静御前に差し出すと、大変喜んで、おいしそうに飲みほしました。

この靈験あらたかなる水を飲んだ静御前は、元気をとり戻し、夫のいる奥州の平泉に向かって出発しました。

この清水は、それ以後、六郎の名字をとり「亀井の水」と呼ばれ、多くの旅人ののどをうるおしました。

